

## 暴力行為等の問題行動に関する発達的研究

前田健一・林孝・中條和光・  
樋口匡貴・山口修司<sup>1)</sup>

A developmental study of violence-related problematic behaviors

Kenichi Maeda, Takashi Hayashi, Kazumitsu Chujo,  
Masataka Higuchi, and Shuji Yamaguchi

The present study examined developmental changes in children and adolescents of their problematic behaviors. Participants were 458 elementary school children (fifth- and sixth-graders), 521 junior high school students (first- and second-graders), and 1,164 high school students (first- and second-graders). They rated the frequency of witnessing, the degree of desiring to experience, and the level of judgment of problematic behaviors on a 6-point scale in each of 24 items regarding three kinds of problematic behaviors; (1) delinquency (e.g., steal things in stores, steal bicycles and things belonging to others), (2) violence (e.g., beat someone, break windows or doors in a school), and (3) aggression and disturbance (e.g., say mean things to peers, threaten or tease others, disturb in class). The results found three patterns of developmental changes in their witnessing and desiring to experience problematic behaviors. As they become older, boys' and girls' delinquency and boys' violence were generally on the increase, but girls' violence was on the decrease. In contrast, aggression and disturbance showed the inverted-U curves, peaking in junior high school students.

平成13年度版の青少年白書(総務庁青少年対策本部,2001)によると、平成11年度に全国で発生した学校内の暴力行為は、小学校の1,509件、中学校の24,246件、高等学校の5,300件であり、合計31,055件と過去最多となっている。小学校では平成10年度(1,528件)よりも19件減少しているが、中学校や高等学校では平成10年度(中学校22,991件、高等学校5,152件)よりも、それぞれ1,255件と148件増加している。この件数は、いわゆる校内暴力の発生件数である。しかし、小・中・高校生の暴力行為は、校内暴力に限らない。文部科学省では平成9年度から学校の内外に分けて暴力行為の

---

1) 広島大学大学院教育学研究科研究生

調査をするように改めている。その結果、平成10年度の校内暴力は、小学校では全小学校の2.3%に当たる557校で、中学校では全中学校の34.3%に当たる3,599校で、高等学校では全高等学校の43.5%に当たる1,809校で発生している。これに対して、学校外で発生した暴力行為は、小学校では全小学校の0.5%に当たる117校で計178件、中学校では全中学校の19.1%に当たる2,001校で計3,792件、高等学校では全高等学校の24.8%に当たる1,032校で計1,591件発生している(総務庁青少年対策本部,2000)。学校外の暴力行為は、学校内の暴力行為と比べると、発生件数は圧倒的に少ない。しかし、発生した学校数やその比率でみると、中学生や高校生の暴力行為は学校内と同様に、学校外でも増加していることがわかる。

児童生徒の暴力行為は、対教師暴力、生徒間暴力(何らかの人間関係がある児童生徒同士の暴力行為に限る)、対人暴力(対教師暴力、生徒間暴力および家庭内暴力を除く)、学校の施設・設備等の器物損壊の4つの形態に大別される。平成11年度版の青少年白書(総務庁青少年対策本部,2000)によると、平成10年度に学校内と学校外で発生した対教師暴力は、小学校では192件と3件、中学校では3,629件と62件、高等学校では577件と11件である。同様に、学校内と学校外の生徒間暴力は、小学校では728件と134件、中学校では10,655件と2,564件、高等学校では3,333件と974件である。これらの発生件数からわかるように、対教師暴力や生徒間暴力は、学校外よりも学校内で発生することが多い。これに対して、対人暴力の発生件数を学校内と学校外に分けると、小学校では30件と41件、中学校では104件と1,166件、高等学校では46件と606件となり、対人暴力は学校外で発生しやすいことがわかる。最後に、器物損壊は小学校で578件、中学校で8,603件、高等学校で1,196件である。これらの統計データから、暴力行為の4つの形態のいずれも、中学生で最も多いことが注目される。また、人に対する直接的な暴力行為である生徒間暴力よりも器物損壊の発生件数が少ないことも注目に値する。それは、中学生が不満、怒り、イライラ、ストレスなどを最も抱きやすい発達段階にあること、しかもその解消や発散の対象が物である場合よりも、むしろ同校生や仲間に向けられる場合が多いことを物語っているからである。

少年の問題行動等に関する調査研究協力者会議(2001)は、最近の児童生徒の問題行動の特徴について次のように指摘している。凶悪犯で検挙された少年のうち、非行歴のない者は全体の約半数(平成11年度では45.5%)を占め、飲酒・喫煙や深夜遊興等の非行の前兆はあるものの、それまで非行を犯したことがない少年がいきなり重大な非行に走るケースが目立っている。このことから、日常的に目立つ前兆(髪型や服装の特徴、粗暴な言動、万引きなどの初発型非行、非行グループへの加入)を示す児童生徒の問題行動に対応することに加えて、一見「おとなしくて目立たない」児童生徒が内面に不満やストレス等を抱え、ある要因によってそれが爆発して起こる形の問題行動への対応が必要であると述べている。こうした「いきなり型」の問題行動に対処するためには、微妙な問題行動の前兆に注意を払うと共に、児童生徒の心の変化を敏感に察知しなければならない。その意味で、教師や親を含む周りの大人にとって、問題行動の発見が容易ではなく、対応に苦慮するタイプではないかと思われる。しかし、こうしたタイプの問題行動が増加する現状を考慮すると、問題行動を起こした児童生徒を取り巻く諸条件を分析するだけでなく、問題行動を起こしていない多くの児童生徒が置かれている環境や状況、あるいは問題行動に対する児童生徒自身の意識や欲求等に

ついて一般的傾向や実態を知る必要があろう。

小嶋・松田(1999)は、広島県内の中学1年生～3年生を対象に、暴力行為に関する8項目と逸脱行為に関する8項目を使用して、暴力欲求、逸脱欲求、規範の崩れ(暴力)、規範の崩れ(逸脱)、暴力の加害経験と被害経験、逸脱行為の経験を調べている。その結果、暴力欲求得点、暴力の加害得点、暴力の被害得点では男子が女子よりも有意に高かった。それに対して、逸脱欲求では女子が男子よりも高かった。しかし、逸脱行為の体験得点では男女差はみられなかった。学年差は規範の崩れ得点(暴力と逸脱行為の両方)で認められ、中1や中2よりも、中3になると、暴力や逸脱行為をそれほど悪くないと評価していた。また、これらの得点間の相関係数を求めた結果、被害得点と規範の崩れ得点(暴力と逸脱行為)間の相関を除く他の相関値はすべて有意な正相関を示した。

小嶋・松田(1999)の結果は、暴力や逸脱行為に対する欲求と行動化が密接に関連すること、欲求や体験が規範意識の低下と関連することを実証している。しかし、中学生のみを対象にしているので、暴力や逸脱行為に関する性差や学年差が中学校以前の小学生段階からみられるのか、あるいは中学校以降の高校生ではどのように変化するのかなど、広範囲の発達傾向を知ることができない。問題行動を起こした児童生徒への対応と同時に、問題行動を起こしていない児童生徒に対する予防的な指導を考えていくためには、各発達段階の特徴を点的に捉えるだけでなく、広範囲の年齢段階を比較しながら問題行動に対する意識や行動がどのように発達し、どの段階から変化するかを線的に検討する必要がある。

児童生徒の問題行動には、学校内外での暴力行為をはじめ、シンナー等の薬物乱用、強盗・強姦・殺人等の凶悪・粗暴な非行、いじめ、性の逸脱行為、暴走族・家庭内暴力、飲酒・喫煙等の不良行為、不登校、家出、自殺など多様な形態が含まれる。これらの問題行動の中には暴力行為と直接関連しないものもあるように思われる。しかし、単発的に発生した問題行動であっても、他の問題行動と複雑に関連しながら、連鎖的にエスカレートしたり、多様な問題行動を同時に抱えていく可能性も十分に考えられる。

以上の点をふまえて、本研究では問題行動に関する質問項目を24項目に拡大し、生徒間暴力・器物損壊を含む暴力行為やいじめ問題、万引き・自転車盗等の窃盗、飲酒・喫煙および規則違反の逸脱行動に関する多様な問題行動を含めることにした。本研究の主な目的は、小学高学年生、中学生、高校生を対象にして、多様な問題行動に関する見聞実態、体験欲求、善悪判断を調べ、学年差や性差を検討すると共に、これらの相互関連を明らかにすることである。

## 方 法

### 対象者

広島県内の公立小学校5・6年生458名(男240名、女218名)、公立中学校1・2年生521名(男290名、女231名)、および公立高校1・2年生1164名(男763名、女401名)の合計2143名(男1293名、女850名)であった。

## 手続き

小学校2校、中学校3校、高校2校のクラスごとに、以下のような質問項目を含む調査を集団で実施した。

## 質問項目

表1に示す24の問題行動に関する質問項目を使用した。見聞実態では、「あなたと同じ年くらいの方が次のことをしているのを見たり聞いたりしたことがどれくらいありますか」と設問し、24の問題行動に関する質問項目のそれぞれについて6段階で評定させた。体験欲求では、「あなたはこれまで、次のことをしてみたいまたはしようという気持ちになったことがどれくらいありますか」と設問し、同じ24の質問項目のそれぞれについて6段階で評定させた。見聞実態と体験欲求で使用した6段階の評定は、「まったくない」(1点)～「とてもたくさんある」(6点)の6段階であった。善悪判断でも同じ24の質問項目を使用し、「友だちが次のことをしていたら、あなたはそれをどれくらい悪いことだと感じますか」と設問して6段階で評定させた。善悪判断で使用した6段階の評

表1 問題行動に関する24の質問項目

項目	質問内容
1.	人をなぐったり、けったりする。
2.	そうじをなまける。
3.	棒やナイフで人を傷つける。
4.	たばこを吸う。
5.	お酒やビールを飲む。
6.	人をおどしたり、傷つくことを言う。
7.	学校でアメやガムを食べたり、ジュースを飲む。
8.	人をおどして、お金や物をとりあげる。
9.	学校にナイフを持ってくる。
10.	お金を払わないで、店から品物を取ってくる。
11.	授業中に、さわいんだり、おしゃべりする。
12.	わざと人の持ち物をこわしたり、かくしたりする。
13.	人を仲間はずれにする。
14.	人の自転車にだまって乗る。
15.	人の欠点や知られたくないことを言って、からかう。
16.	わざと学校のガラスや壁をこわす。
17.	机や椅子に、落書きをする。
18.	人のいやなこと、やりたくないことを無理にやらせる。
19.	犬、猫などの動物をいじめたり、傷つける。
20.	髪の毛を染めたり、パーマをかける。
21.	授業中に、かってに教室を出たり入ったりする。
22.	人の傘や持ち物をかってに使う。
23.	廊下で、さわいんだり遊んだりして教室の授業をじゃまする。
24.	テストのとき、人の答えや本をこっそり見て答える。

定は、「まったく悪くない」(1点)～「とてもたくさん悪い」(6点)の6段階であった。

## 結 果

### (1)見聞実態

表2は、24項目の見聞実態得点について男女別に小学生、中学生、高校生の平均値と標準偏差(*SD*)を示したものである。項目別に2(性別)×3(学校種)の2要因分散分析を行った。その結果、性別の主効果(いずれも $df=1$ , 2137)は次の7項目で有意であった。項目1( $F=70.38$ ,  $p<.001$ )、項目7( $F=54.31$ ,  $p<.001$ )、項目8( $F=8.59$ ,  $p<.005$ )、項目9( $F=6.67$ ,  $p<.01$ )、項目13( $F=45.30$ ,  $p<.001$ )、項目17( $F=15.56$ ,  $p<.001$ )、項目20( $F=83.64$ ,  $p<.001$ )。

男>女の結果は項目1の男(3.20)>女(2.58)、項目8の男(1.74)>女(1.49)、項目9の男(1.38)>女(1.25)の3項目であった。逆に、男<女の結果は項目7の男(3.91)<女(4.20)、項目13の男(2.53)<女(2.98)、項目17の男(2.98)<女(3.35)、項目20の男(3.09)<女(3.68)の4項目であった。

学校種の主効果(いずれも $df=2$ , 2137)は、項目3を除く他の23項目で有意であった。項目1( $F=76.24$ ,  $p<.001$ )、項目2( $F=10.31$ ,  $p<.001$ )、項目4( $F=200.47$ ,  $p<.001$ )、項目5( $F=158.04$ ,  $p<.001$ )、項目6( $F=9.79$ ,  $p<.001$ )、項目7( $F=438.33$ ,  $p<.001$ )、項目8( $F=9.95$ ,  $p<.01$ )、項目9( $F=4.46$ ,  $p<.05$ )、項目10( $F=12.74$ ,  $p<.001$ )、項目11( $F=19.69$ ,  $p<.001$ )、項目12( $F=47.58$ ,  $p<.001$ )、項目13( $F=38.14$ ,  $p<.001$ )、項目14( $F=30.69$ ,  $p<.001$ )、項目15( $F=12.91$ ,  $p<.001$ )、項目16( $F=4.96$ ,  $p<.01$ )、項目17( $F=16.26$ ,  $p<.001$ )、項目18( $F=11.90$ ,  $p<.001$ )、項目19( $F=12.86$ ,  $p<.001$ )、項目20( $F=128.20$ ,  $p<.001$ )、項目21( $F=13.42$ ,  $p<.001$ )、項目22( $F=50.17$ ,  $p<.001$ )、項目23( $F=26.80$ ,  $p<.001$ )、項目24( $F=63.21$ ,  $p<.001$ )。

多重比較(Ryan法; いずれも $p<.05$ )の結果、学校種間差には次の3つのパターンがみられた。第1パターン(小<中<高、小<中≧高または小≧中<高)を示したのは、次の8項目であった。項目4の小(1.41)<中(2.45)<高(3.38)、項目5の小(1.67)<中(2.01)<高(3.24)、項目7の小(2.28)<中(3.82)<高(4.91)、項目10の小(1.65)<中(1.86)<高(2.05)、項目20の小(2.38)<中(3.05)<高(3.96)、項目22の小(1.71)<中(2.07)<高(2.58)。項目8の小(1.40)<中(1.59)≧高(1.69)、項目14の小(1.54)<中(2.00)≧高(2.15)。第1パターンとは逆の第2パターン(小≧中>高、小>中≧高または小>中>高)を示したのは、次の9項目であった。項目1の小(3.39)≧中(3.29)>高(2.45)、項目12の小(2.59)≧中(2.56)>高(1.90)、項目13の小(3.02)≧中(3.14)>高(2.44)、項目16の小(1.63)≧中(1.68)>高(1.49)、項目17の小(3.35)≧中(3.47)>高(2.95)、項目18の小(2.35)≧中(2.48)>高(2.09)、項目23の小(2.57)≧中(2.67)>高(2.08)。項目19の小(1.60)>中(1.47)>高(1.32)、項目24の小(2.63)>中(1.85)≧高(1.81)。

第3パターン(小≧高<中、小<高<中または小≧高>中)を示したのは、次の6項目であった。項目6の小(3.07)≧高(2.93)<中(3.33)、項目9の小(1.28)≧高(1.28)<中(1.41)、項目11の小(4.32)≧高(4.28)<中(4.77)、項目15の小(2.89)≧高(2.73)<中(3.19)、項目21の小(1.90)≧高(2.03)

<中(2.34)。項目2の小(4.01)<高(4.19)<中(4.37)。

性別×学校種の交互作用(いずれも $df=2$ , 2137)は、次の15項目で有意であった。項目1( $F=18.93$ ,  $p<.001$ )、項目3( $F=11.58$ ,  $p<.001$ )、項目6( $F=6.00$ ,  $p<.005$ )、項目8( $F=5.79$ ,  $p<.05$ )、項目9( $F=4.87$ ,  $p<.01$ )、項目11( $F=3.17$ ,  $p<.05$ )、項目12( $F=17.17$ ,  $p<.001$ )、項目13( $F=5.15$ ,  $p<.01$ )、項目15( $F=9.33$ ,  $p<.001$ )、項目16( $F=10.75$ ,  $p<.001$ )、項目18( $F=9.97$ ,  $p<.001$ )、項目19( $F=9.74$ ,  $p<.001$ )、項目21( $F=15.05$ ,  $p<.001$ )、項目23( $F=17.89$ ,  $p<.001$ )、項目24( $F=25.55$ ,  $p<.001$ )。

有意な交互作用がみられた15項目について、まず学校種別に男女差の単純主効果を検定した。その結果、男>女の結果は、項目1の中と高(ともに $p<.001$ )、項目3の中と高(順に $p<.05$ ,  $p<.005$ )、項目6の高( $p<.05$ )、項目8の高( $p<.001$ )、項目9の中と高(順に $p<.005$ ,  $p<.05$ )、項目12の高( $p<.001$ )、項目15の高( $p<.01$ )、項目16の高( $p<.05$ )、項目18の高( $p<.001$ )、項目21の高( $p$

表2 問題行動の見聞実態に関する項目別平均値(SD)

項目	小学校		中学校		高校	
	男(N=240)	女(N=218)	男(N=290)	女(N=231)	男(N=763)	女(N=401)
1	3.42(1.46)	3.35(1.55)	3.56(1.36)	3.02(1.34)	3.00(1.57)	1.91(1.13)
2	3.87(1.29)	4.15(1.33)	4.28(1.36)	4.47(1.17)	4.23(1.54)	4.14(1.26)
3	1.20(0.62)	1.44(0.99)	1.47(0.96)	1.32(0.75)	1.45(0.99)	1.24(0.65)
4	1.32(0.96)	1.50(1.19)	2.43(1.69)	2.47(1.61)	3.45(1.95)	3.31(1.77)
5	1.62(1.18)	1.71(1.28)	2.05(1.43)	1.97(1.33)	3.24(1.84)	3.23(1.71)
6	2.89(1.55)	3.25(1.69)	3.33(1.63)	3.34(1.53)	3.07(1.60)	2.79(1.51)
7	2.07(1.40)	2.50(1.58)	3.49(1.77)	4.15(1.53)	4.64(1.61)	5.16(1.18)
8	1.37(0.96)	1.44(1.01)	1.68(1.14)	1.51(1.00)	1.88(1.32)	1.51(0.99)
9	1.24(0.83)	1.32(0.88)	1.51(1.09)	1.30(0.69)	1.37(0.94)	1.18(0.60)
10	1.56(1.11)	1.73(1.18)	1.91(1.45)	1.81(1.24)	2.12(1.50)	1.98(1.38)
11	4.23(1.52)	4.41(1.46)	4.63(1.45)	4.91(1.24)	4.35(1.58)	4.21(1.46)
12	2.43(1.50)	2.76(1.56)	2.53(1.43)	2.59(1.45)	2.19(1.44)	1.60(0.99)
13	2.63(1.49)	3.35(1.46)	2.84(1.60)	3.43(1.43)	2.36(1.46)	2.51(1.44)
14	1.52(1.05)	1.56(1.09)	2.03(1.40)	1.97(1.27)	2.26(1.57)	2.03(1.42)
15	2.68(1.56)	3.10(1.65)	3.08(1.65)	3.29(1.49)	2.90(1.59)	2.56(1.41)
16	1.43(1.00)	1.82(1.35)	1.64(1.19)	1.73(1.16)	1.59(1.08)	1.39(0.83)
17	3.25(1.82)	3.45(1.78)	3.27(1.73)	3.67(1.62)	2.78(1.61)	3.11(1.50)
18	2.28(1.51)	2.43(1.48)	2.41(1.43)	2.55(1.36)	2.33(1.43)	1.85(1.12)
19	1.46(1.01)	1.73(1.23)	1.54(1.03)	1.39(0.83)	1.39(0.94)	1.25(0.67)
20	2.05(1.46)	2.72(1.68)	2.66(1.66)	3.44(1.74)	3.58(1.86)	4.35(1.55)
21	1.83(1.30)	1.97(1.39)	2.21(1.55)	2.47(1.66)	2.34(1.67)	1.72(1.18)
22	1.64(1.19)	1.78(1.27)	1.98(1.33)	2.16(1.37)	2.59(1.69)	2.57(1.56)
23	2.33(1.49)	2.82(1.58)	2.51(1.54)	2.83(1.55)	2.32(1.55)	1.84(1.22)
24	2.30(1.48)	2.95(1.72)	1.75(1.28)	1.95(1.28)	2.06(1.50)	1.57(1.04)

<.001)、項目23の高( $p < .001$ )、項目24の高( $p < .001$ )でみられた。逆に男<女の結果は、項目3の小( $p < .001$ )、項目6の小( $p < .01$ )、項目11の中( $p < .05$ )、項目12の小( $p < .005$ )、項目13の小と中(ともに $p < .001$ )、項目15の小( $p < .005$ )、項目16の小( $p < .001$ )、項目19の小( $p < .001$ )、項目21の中( $p < .05$ )、項目23の小と中(順に $p < .001$ ,  $p < .01$ )、項目24の小( $p < .001$ )でみられた。

次に、男女別に学校種間差を検定した。多重比較(Ryan法; いずれも $p < .05$ )の結果、第1パターン(小<中<高、小<中≧高または小≧中<高)を示したのは、項目3の男(小<中≧高)、項目8の男(小<中<高)、項目15の男(小<中)、項目21の男(小<中≧高)であった。逆の第2パターン(小≧中>高、小>中≧高または小>中>高)を示したのは、項目1の男(小≧中>高)と女(小>中>高)、項目3の女(小>高)、項目6の女(小≧中>高)、項目12の男と女(ともに小≧中>高)、項目13の男と女(ともに小≧中>高)、項目15の女(小≧中>高)、項目16の女(小≧中>高)、項目18の女(小≧中>高)、項目19の女(小>中≧高)、項目23の女(小≧中>高)、項目24の女(小>中>高)であった。なお、項目24の男(小>高>中)では、高と中の順序が異なるが、第2パターンに含めた。第3パターン(小≧高<中、小<高<中または小≧高>中)を示したのは、項目6の男(小≧高<中)、項目9の男(小≧高<中)、項目11の男と女(ともに小≧高<中)、項目21の女(小≧高<中)であった。

## (2)体験欲求

表3は、24項目の体験欲求得点について男女別に小学生、中学生、高校生の平均値と標準偏差( $SD$ )を示したものである。項目別に2(性別)×3(学校種)の2要因分散分析を行った。その結果、性別の主効果(いずれも $df = 1$ , 2137)は次の18項目で有意であった。項目1( $F = 77.23$ ,  $p < .001$ )、項目3( $F = 3.97$ ,  $p < .05$ )、項目4( $F = 10.71$ ,  $p < .005$ )、項目5( $F = 5.20$ ,  $p < .05$ )、項目6( $F = 16.72$ ,  $p < .001$ )、項目7( $F = 75.46$ ,  $p < .001$ )、項目8( $F = 18.71$ ,  $p < .001$ )、項目9( $F = 9.22$ ,  $p < .005$ )、項目10( $F = 8.83$ ,  $p < .005$ )、項目12( $F = 14.31$ ,  $p < .001$ )、項目14( $F = 21.63$ ,  $p < .001$ )、項目15( $F = 36.47$ ,  $p < .001$ )、項目17( $F = 4.01$ ,  $p < .05$ )、項目18( $F = 26.72$ ,  $p < .001$ )、項目19( $F = 21.03$ ,  $p < .001$ )、項目20( $F = 129.93$ ,  $p < .001$ )、項目22( $F = 18.10$ ,  $p < .001$ )、項目23( $F = 7.06$ ,  $p < .01$ )。

男>女の結果は項目1の男(2.69)>女(2.01)、項目3の男(1.34)>女(1.22)、項目4の男(1.88)>女(1.46)、項目5の男(2.63)>女(2.26)、項目6の男(2.09)>女(1.74)、項目8の男(1.40)>女(1.14)、項目9の男(1.25)>女(1.10)、項目10の男(1.67)>女(1.41)、項目12の男(1.66)>女(1.40)、項目14の男(1.62)>女(1.28)、項目15の男(2.10)>女(1.67)、項目18の男(1.78)>女(1.43)、項目19の男(1.26)>女(1.08)、項目22の男(1.69)>女(1.35)、項目23の男(1.64)>女(1.45)の15項目であった。逆に、男<女の結果は項目7の男(3.20)<女(3.72)、項目17の男(2.44)<女(2.61)、項目20の男(2.33)<女(3.19)の3項目であった。

学校種の主効果(いずれも $df = 2$ , 2137)は、次の20項目で有意であった。項目1( $F = 5.01$ ,  $p < .01$ )、項目2( $F = 18.00$ ,  $p < .001$ )、項目3( $F = 5.06$ ,  $p < .01$ )、項目4( $F = 27.02$ ,  $p < .001$ )、項目5( $F = 39.23$ ,  $p < .001$ )、項目7( $F = 208.09$ ,  $p < .001$ )、項目8( $F = 5.34$ ,  $p < .005$ )、項目9( $F = 3.93$ ,  $p < .05$ )、項目10( $F = 7.25$ ,  $p < .001$ )、項目11( $F = 8.18$ ,  $p < .001$ )、項目12( $F = 3.96$ ,  $p < .05$ )、

項目13( $F=22.37, p<.001$ )、項目14( $F=12.01, p<.001$ )、項目15( $F=10.35, p<.001$ )、項目17( $F=7.83, p<.001$ )、項目18( $F=3.47, p<.05$ )、項目20( $F=76.61, p<.001$ )、項目22( $F=17.11, p<.001$ )、項目23( $F=4.40, p<.05$ )、項目24( $F=11.39, p<.001$ )。

多重比較(Ryan法; いずれも $p<.05$ )の結果、学校種間差には次の3つのパターンがみられた。第1パターン(小<中<高, 小<中≒高または小≒中<高)を示したのは、次の11項目であった。項目2の小(3.19)<中(3.75)≒高(3.61)、項目3の小(1.17)<高(1.33)、項目4の小(1.28)<中(1.49)<高(1.87)、項目5の小(1.93)≒中(2.12)<高(2.78)、項目7の小(2.19)<中(2.97)<高(4.22)、項目8の小(1.14)<高(1.32)、項目9の小(1.09)<高(1.20)、項目10の小(1.34)<中(1.53)≒高(1.61)、項目14の小(1.23)<中(1.39)<高(1.56)、項目20の小(1.91)<中(2.52)<高(3.23)、項目22の小(1.28)≒中(1.37)<高(1.67)。

第1パターンとは逆の第2パターン(小≒中>高, 小>中≒高または小>中>高)を示したのは、

表3 問題行動の体験欲求に関する項目別平均値(SD)

項目	小学校		中学校		高校	
	男(N=240)	女(N=218)	男(N=290)	女(N=231)	男(N=763)	女(N=401)
1	2.66(1.58)	2.35(1.51)	2.75(1.51)	2.08(1.33)	2.68(1.61)	1.79(1.25)
2	3.22(1.60)	3.17(1.60)	3.71(1.64)	3.78(1.45)	3.67(1.77)	3.55(1.56)
3	1.15(0.65)	1.19(0.68)	1.34(0.90)	1.20(0.66)	1.40(1.08)	1.26(0.84)
4	1.24(0.84)	1.32(1.01)	1.52(1.17)	1.46(1.13)	2.21(1.83)	1.54(1.25)
5	1.96(1.47)	1.91(1.48)	2.12(1.57)	2.11(1.50)	3.03(1.96)	2.53(1.77)
6	1.92(1.25)	1.88(1.24)	2.04(1.32)	1.94(1.18)	2.16(1.48)	1.55(1.09)
7	1.95(1.54)	2.44(1.77)	2.50(1.70)	3.43(1.67)	3.87(1.88)	4.58(1.54)
8	1.15(0.69)	1.14(0.61)	1.33(0.89)	1.15(0.60)	1.50(1.20)	1.13(0.61)
9	1.10(0.61)	1.08(0.48)	1.24(0.87)	1.13(0.60)	1.30(0.96)	1.10(0.54)
10	1.37(0.97)	1.32(0.89)	1.58(1.23)	1.48(1.03)	1.79(1.46)	1.42(1.10)
11	3.22(1.65)	3.34(1.65)	3.59(1.64)	3.75(1.62)	3.44(1.78)	3.33(1.73)
12	1.56(1.17)	1.63(1.11)	1.70(1.09)	1.51(1.00)	1.67(1.21)	1.22(0.73)
13	1.95(1.29)	2.32(1.44)	2.12(1.43)	2.36(1.50)	1.88(1.32)	1.62(1.07)
14	1.25(0.77)	1.22(0.74)	1.55(1.22)	1.23(0.69)	1.76(1.43)	1.35(1.02)
15	1.99(1.35)	1.76(1.14)	2.22(1.47)	1.99(1.27)	2.09(1.40)	1.44(0.90)
16	1.24(0.90)	1.31(1.01)	1.37(1.04)	1.42(1.11)	1.50(1.23)	1.24(0.89)
17	2.64(1.74)	2.72(1.70)	2.54(1.76)	2.87(1.63)	2.33(1.59)	2.39(1.61)
18	1.62(1.20)	1.53(1.12)	1.83(1.28)	1.59(0.98)	1.81(1.30)	1.29(0.73)
19	1.25(0.90)	1.10(0.52)	1.19(0.64)	1.08(0.36)	1.28(0.90)	1.07(0.48)
20	1.48(1.29)	2.34(1.80)	1.94(1.62)	3.10(1.92)	2.75(1.99)	3.71(1.90)
21	1.45(1.14)	1.49(1.12)	1.57(1.25)	1.76(1.40)	1.75(1.41)	1.47(1.09)
22	1.36(0.95)	1.20(0.63)	1.44(1.06)	1.30(0.85)	1.88(1.53)	1.46(1.12)
23	1.62(1.24)	1.63(1.22)	1.68(1.26)	1.57(1.07)	1.62(1.27)	1.28(0.80)
24	1.78(1.34)	2.02(1.47)	1.61(1.30)	1.49(1.04)	1.87(1.53)	1.38(1.02)



次の7項目であった。項目1の小(2.51)≒中(2.41)>高(2.24)、項目12の小(1.60)≒中(1.60)>高(1.45)、項目13の小(2.13)≒中(2.24)>高(1.75)、項目17の小(2.68)≒中(2.71)>高(2.36)、項目18の中(1.71)>高(1.55)、項目23の小(1.63)≒中(1.63)>高(1.45)、項目24の小(1.90)>中(1.55)≒高(1.63)。

第3パターン(小≒高く中、小<高く中または小≒高く中)を示したのは、次の2項目であった。項目11の小(3.28)≒高(3.39)<中(3.67)、項目15の小(1.87)≒高(1.77)<中(2.10)。

性別×学校種の交互作用(いずれも $df=2$ , 2137)は、次の15項目で有意であった。項目1( $F=5.73$ ,  $p<.005$ )、項目4( $F=11.70$ ,  $p<.001$ )、項目5( $F=3.73$ ,  $p<.05$ )、項目6( $F=8.21$ ,  $p<.001$ )、項目8( $F=5.50$ ,  $p<.005$ )、項目10( $F=3.08$ ,  $p<.05$ )、項目12( $F=8.58$ ,  $p<.001$ )、項目13( $F=9.23$ ,  $p<.001$ )、項目14( $F=4.38$ ,  $p<.05$ )、項目15( $F=5.31$ ,  $p<.005$ )、項目16( $F=4.07$ ,  $p<.05$ )、

表4 問題行動の善悪判断に関する項目別平均値(SD)

項目	小学校		中学校		高校	
	男(N=240)	女(N=218)	男(N=290)	女(N=231)	男(N=763)	女(N=401)
1	4.77(1.13)	4.92(1.02)	4.60(1.19)	5.04(0.83)	4.71(1.16)	5.36(0.74)
2	3.91(1.14)	3.95(1.04)	3.71(1.21)	3.87(1.03)	3.66(1.31)	3.83(1.00)
3	5.55(1.16)	5.78(0.70)	5.56(1.07)	5.71(0.56)	5.57(1.01)	5.85(0.54)
4	5.04(1.38)	5.11(1.17)	4.95(1.36)	4.91(1.17)	4.04(1.66)	4.47(1.40)
5	4.57(1.49)	4.66(1.45)	4.46(1.51)	4.54(1.32)	3.53(1.66)	3.90(1.50)
6	4.98(1.23)	5.05(0.99)	4.90(1.23)	5.06(0.89)	4.82(1.23)	5.33(0.90)
7	4.37(1.48)	4.17(1.34)	4.11(1.51)	3.87(1.32)	2.80(1.58)	2.38(1.40)
8	5.55(1.16)	5.61(0.83)	5.33(1.15)	5.63(0.60)	5.37(1.06)	5.68(0.67)
9	5.15(1.31)	5.48(0.99)	5.05(1.38)	5.23(1.07)	4.77(1.52)	5.26(1.24)
10	5.46(1.17)	5.44(0.99)	5.33(1.18)	5.58(0.74)	5.18(1.17)	5.51(0.89)
11	3.90(1.31)	3.77(1.18)	3.92(1.33)	3.75(1.23)	3.72(1.48)	3.96(1.25)
12	4.90(1.28)	5.05(1.04)	4.86(1.25)	4.94(1.03)	4.83(1.25)	5.43(0.81)
13	4.64(1.33)	4.73(1.14)	4.82(1.29)	4.82(1.16)	4.78(1.29)	5.32(0.88)
14	4.82(1.29)	5.00(1.15)	4.42(1.41)	4.68(1.17)	4.69(1.34)	5.19(1.01)
15	4.89(1.26)	5.06(1.08)	4.75(1.33)	5.00(0.95)	4.69(1.29)	5.35(0.87)
16	5.30(1.23)	5.37(0.99)	5.05(1.26)	5.22(0.97)	4.96(1.28)	5.37(0.96)
17	3.88(1.43)	3.91(1.49)	3.82(1.52)	3.82(1.37)	3.63(1.55)	3.96(1.40)
18	4.97(1.21)	5.08(1.14)	4.84(1.32)	5.11(0.95)	4.77(1.27)	5.43(0.80)
19	5.27(1.28)	5.57(0.88)	5.42(1.02)	5.64(0.75)	5.40(1.14)	5.75(0.67)
20	3.82(1.71)	3.66(1.59)	3.89(1.64)	3.53(1.56)	2.90(1.71)	2.80(1.43)
21	4.52(1.36)	4.45(1.31)	4.58(1.42)	4.52(1.21)	4.22(1.45)	4.64(1.30)
22	4.70(1.41)	4.93(1.10)	4.63(1.31)	4.87(1.00)	4.67(1.36)	5.12(1.05)
23	4.71(1.38)	4.60(1.24)	4.70(1.35)	4.78(1.18)	4.58(1.34)	4.97(1.08)
24	4.87(1.40)	4.77(1.33)	5.14(1.28)	5.31(1.02)	4.68(1.48)	5.21(1.14)

項目18( $F=5.55, p<.005$ )、項目21( $F=5.53, p<.005$ )、項目23( $F=3.52, p<.05$ )、項目24( $F=1.89, p<.001$ )。

有意な交互作用がみられた15項目について、まず学校種別に男女差の単純主効果を検定した。その結果、男>女の結果は、項目1の小と中と高(順に $p<.05, p<.001, p<.001$ )、項目4の高( $p<.001$ )、項目5の高( $p<.001$ )、項目6の高( $p<.001$ )、項目8の中と高(順に $p<.05, p<.001$ )、項目10の高( $p<.001$ )、項目12の中と高(順に $p<.05, p<.001$ )、項目13の高( $p<.05$ )、項目14の中と高(ともに $p<.001$ )、項目15の小と中と高(順に $p<.05, p<.05, p<.001$ )、項目16の高( $p<.005$ )、項目18の中と高(順に $p<.05, p<.001$ )、項目21の高( $p<.01$ )、項目23の高( $p<.001$ )、項目24の高( $p<.001$ )でみられた。逆に男<女の結果は、項目13の小と中(順に $p<.001, p<.05$ )、項目24の小( $p<.05$ )でみられた。

次に、男女別に学校種間差を検定した。多重比較(Ryan法; いずれも $p<.05$ )の結果、第1パターン(小<中<高、小<中≧高または小≧中<高)を示したのは、項目4の男(小<中<高)、項目5の男と女(ともに小≧中<高)、項目8の男(小<中<高)、項目10の男(小≧中<高)、項目14の男(小<中<高)、項目16の男(小<高)、項目21の男(小≧中<高)であった。逆の第2パターン(小≧中>高、小>中≧高または小>中>高)を示したのは、項目1の女(小≧中>高)、項目6の女(小≧中>高)、項目12の女(小≧中>高)、項目13の女(小≧中>高)、項目15の女(小≧中>高)、項目18の女(小≧中>高)、項目23の女(小≧中>高)、項目24の女(小>中≧高)であった。第3パターン(小≧高<中、小<高<中または小≧高>中)を示したのは、項目21の女(小≧高<中)であった。

### (3) 善悪判断

表4は、24項目の善悪判断得点について男女別に小学生、中学生、高校生の平均値と標準偏差( $SD$ )を示したものである。項目別に2(性別)×3(学校種)の2要因分散分析を行った。その結果、性別の主効果(いずれも $df=1, 2137$ )は次の21項目で有意であった。項目1( $F=70.40, p<.001$ )、項目2( $F=4.59, p<.05$ )、項目3( $F=27.52, p<.001$ )、項目4( $F=5.09, p<.05$ )、項目5( $F=6.20, p<.05$ )、項目6( $F=22.10, p<.001$ )、項目7( $F=16.62, p<.001$ )、項目8( $F=24.29, p<.001$ )、項目9( $F=27.87, p<.001$ )、項目10( $F=14.21, p<.001$ )、項目12( $F=26.03, p<.001$ )、項目13( $F=13.92, p<.001$ )、項目14( $F=28.91, p<.001$ )、項目15( $F=41.57, p<.001$ )、項目16( $F=15.33, p<.001$ )、項目18( $F=39.84, p<.001$ )、項目19( $F=37.67, p<.001$ )、項目20( $F=7.19, p<.01$ )、項目22( $F=25.78, p<.001$ )、項目23( $F=4.00, p<.05$ )、項目24( $F=9.72, p<.005$ )。

男>女の結果は項目7の男(3.38)>女(3.24)、項目20の男(3.29)>女(3.22)の2項目であった。逆に、男<女の結果は次の19項目であった。項目1の男(4.69)<女(5.16)、項目2の男(3.72)<女(3.87)、項目3の男(5.56)<女(5.80)、項目4の男(4.43)<女(4.75)、項目5の男(3.93)<女(4.27)、項目6の男(4.86)<女(5.18)、項目8の男(5.39)<女(5.65)、項目9の男(4.90)<女(5.31)、項目10の男(5.26)<女(5.51)、項目12の男(4.85)<女(5.20)、項目13の男(4.76)<女(5.03)、項目14の男(4.65)<女(5.01)、項目15の男(4.74)<女(5.18)、項目16の男(5.04)<女(5.33)、項目18の男(4.83)<女(5.26)、項目19の男(5.38)<女(5.68)、項目22の男(4.67)<女(5.00)、項目23の男(4.

63) <女(4.82)、項目24の男(4.82) < 女(5.12)。

学校種の主効果(いずれも  $df = 2, 2137$ )は、次の13項目で有意であった。項目1 ( $F = 7.61, p < .001$ )、項目2 ( $F = 3.99, p < .05$ )、項目4 ( $F = 54.17, p < .001$ )、項目5 ( $F = 59.39, p < .001$ )、項目7 ( $F = 219.32, p < .001$ )、項目9 ( $F = 7.64, p < .001$ )、項目12 ( $F = 6.24, p < .005$ )、項目13 ( $F = 14.02, p < .001$ )、項目14 ( $F = 17.64, p < .001$ )、項目16 ( $F = 5.12, p < .01$ )、項目19 ( $F = 3.72, p < .05$ )、項目20 ( $F = 57.06, p < .001$ )、項目24 ( $F = 14.56, p < .001$ )。

多重比較(Ryan法; いずれも  $p < .05$ )の結果、学校種間差には次の3つのパターンがみられた。第1パターン(小 < 中 < 高, 小 < 中 ≒ 高または小 ≒ 中 < 高)を示したのは、次の4項目であった。項目1の小(4.84) ≒ 中(4.82) < 高(5.04)、項目12の小(4.97) ≒ 中(4.90) < 高(5.13)、項目13の小(4.69) ≒ 中(4.82) < 高(5.05)、項目19の小(5.42) < 高(5.57)。

表5 項目別・学校種別の見聞実態、体験欲求、善悪判断の相関係数

項目	見聞実態と体験欲求			体験欲求と善悪判断			見聞実態と善悪判断		
	小学校	中学校	高校	小学校	中学校	高校	小学校	中学校	高校
1	.49**	.42**	.47**	-.29**	-.44**	-.35**	-.09†	-.25**	-.24**
2	.45**	.47**	.43**	-.23**	-.33**	-.33**	-.06	-.21**	-.14**
3	.36**	.31**	.35**	-.14**	-.24**	-.22**	-.05	-.24**	-.09**
4	.18**	.19**	.38**	-.27**	-.40**	-.49**	-.11*	-.24**	-.27**
5	.45**	.48**	.52**	-.36**	-.46**	-.50**	-.31**	-.35**	-.38**
6	.46**	.39**	.41**	-.16**	-.29**	-.27**	-.04	-.18**	-.10**
7	.45**	.46**	.51**	-.41**	-.48**	-.49**	-.27**	-.24**	-.31**
8	.22**	.27**	.29**	-.20**	-.37**	-.32**	-.15**	-.22**	-.15**
9	.38**	.30**	.30**	-.19**	-.29**	-.25**	-.12**	-.23**	-.20**
10	.44**	.38**	.41**	-.29**	-.35**	-.37**	-.21**	-.20**	-.19**
11	.42**	.38**	.43**	-.36**	-.37**	-.42**	-.22**	-.18**	-.19**
12	.44**	.40**	.43**	-.28**	-.25**	-.27**	-.12*	-.25**	-.20**
13	.53**	.49**	.45**	-.27**	-.36**	-.33**	-.16**	-.20**	-.19**
14	.32**	.33**	.48**	-.18**	-.32**	-.37**	-.08	-.21**	-.21**
15	.45**	.42**	.44**	-.26**	-.22**	-.31**	-.05	-.12**	-.16**
16	.28**	.33**	.29**	-.17**	-.35**	-.31**	-.12*	-.23**	-.16**
17	.54**	.56**	.51**	-.35**	-.49**	-.40**	-.26**	-.36**	-.30**
18	.43**	.37**	.43**	-.29**	-.32**	-.40**	-.10*	-.18**	-.19**
19	.39**	.26**	.29**	-.18**	-.26**	-.24**	-.05	-.02	-.15**
20	.45**	.28**	.37**	-.38**	-.51**	-.45**	-.23**	-.24**	-.25**
21	.30**	.21**	.36**	-.22**	-.42**	-.36**	-.21**	-.16**	-.17**
22	.33**	.33**	.45**	-.20**	-.34**	-.38**	-.09*	-.20**	-.20**
23	.33**	.29**	.35**	-.36**	-.41**	-.31**	-.05	-.21**	-.12**
24	.41**	.22**	.40**	-.43**	-.29**	-.33**	-.20**	-.15**	-.20**

注) † :  $p < .10$ , \* :  $p < .05$ , \*\* :  $p < .01$ 。

第1パターンとは逆の第2パターン(小 $\div$ 中 $>$ 高、小 $>$ 中 $\div$ 高または小 $>$ 中 $>$ 高)を示したのは、次の7項目であった。項目2の小(3.93) $>$ 高(3.75)、項目4の小(5.08) $\div$ 中(4.93) $>$ 高(4.26)、項目5の小(4.61) $\div$ 中(4.50) $>$ 高(3.72)、項目7の小(4.27) $>$ 中(3.99) $>$ 高(2.59)、項目9の小(5.32) $>$ 高(5.02)、項目16の小(5.34) $>$ 中(5.14) $\div$ 高(5.16)、項目20の小(3.74) $\div$ 中(3.71) $>$ 高(2.85)。

第3パターン(小 $\div$ 高 $<$ 中、小 $<$ 高 $<$ 中または小 $\div$ 高 $>$ 中)を示したのは、次の2項目であった。項目14の小(4.91) $\div$ 高(4.94) $>$ 中(4.55)、項目24の小(4.82) $\div$ 高(4.95) $<$ 中(5.23)。

性別 $\times$ 学校種の交互作用(いずれも $df=2$ , 2137)は、次の14項目で有意であった。項目1( $F=8.49$ ,  $p<.001$ )、項目4( $F=4.02$ ,  $p<.05$ )、項目6( $F=6.43$ ,  $p<.005$ )、項目8( $F=3.29$ ,  $p<.05$ )、項目10( $F=4.47$ ,  $p<.05$ )、項目11( $F=4.08$ ,  $p<.05$ )、項目12( $F=9.19$ ,  $p<.001$ )、項目13( $F=8.91$ ,  $p<.001$ )、項目15( $F=7.27$ ,  $p<.001$ )、項目16( $F=3.59$ ,  $p<.05$ )、項目18( $F=9.02$ ,  $p<.001$ )、項目21( $F=6.22$ ,  $p<.005$ )、項目23( $F=5.76$ ,  $p<.005$ )、項目24( $F=8.58$ ,  $p<.001$ )。

有意な交互作用がみられた14項目について、まず学校種別に男女差の単純主効果を検定した。その結果、男 $<$ 女の結果は次の項目でみられたが、男 $>$ 女の結果はすべての項目においてみられなかった。項目1の中と高(ともに $p<.001$ )、項目4の高( $p<.001$ )、項目6の高( $p<.001$ )、項目8の中と高(ともに $p<.001$ )、項目10の中と高(順に $p<.005$ ,  $p<.001$ )、項目11の高( $p<.05$ )、項目12の高( $p<.001$ )、項目13の高( $p<.001$ )、項目15の中と高(順に $p<.01$ ,  $p<.001$ )、項目16の高( $p<.001$ )、項目18の中と高(順に $p<.005$ ,  $p<.001$ )、項目21の高( $p<.001$ )、項目23の高( $p<.001$ )、項目24の高( $p<.001$ )。

次に、男女別に学校種間差を検定した。多重比較(Ryan法; いずれも $p<.05$ )の結果、第1パターン(小 $<$ 中 $<$ 高、小 $<$ 中 $\div$ 高または小 $\div$ 中 $<$ 高)を示したのは、項目1の女(小 $\div$ 中 $<$ 高)、項目6の女(小 $\div$ 中 $<$ 高)、項目12の女(小 $\div$ 中 $<$ 高)、項目13の女(小 $\div$ 中 $<$ 高)、項目15の女(小 $\div$ 中 $<$ 高)、項目18の女(小 $\div$ 中 $<$ 高)、項目23の女(小 $<$ 高)、項目24の女(小 $<$ 中 $\div$ 高)であった。逆の第2パターン(小 $\div$ 中 $>$ 高、小 $>$ 中 $\div$ 高または小 $>$ 中 $>$ 高)を示したのは、項目4の男と女(小 $\div$ 中 $>$ 高)、項目8の男(小 $>$ 中 $\div$ 高)、項目10の男(小 $>$ 高)、項目16の男(小 $>$ 中 $\div$ 高)、項目21の男(小 $\div$ 中 $>$ 高)であった。第3パターン(小 $\div$ 高 $<$ 中、小 $<$ 高 $<$ 中または小 $\div$ 高 $>$ 中)を示したのは、項目24の男(小 $\div$ 高 $<$ 中)であった。

#### (4)得点間の相関値

表5は、小学校の男女全体( $N=458$ )、中学校の男女全体( $N=521$ )、高校の男女全体( $N=1164$ )のデータに基づいて、問題行動の見聞実態得点、体験欲求得点および善悪判断得点の関係を相関係数によって示したものである。表5の相関パターンから、次の4点が指摘できる。①見聞実態と体験欲求の相関値は、24項目すべてにおいて有意な正相関を示した。②体験欲求と善悪判断の相関値も24項目すべてにおいて有意な負相関を示した。③見聞実態と善悪判断の相関値は、全般に低い負の相関または無相関に近い値を示した。④これら①②③の相関パターンは、小学校、中学校、高校のいずれの発達段階でも共通していた。

## 考 察

本研究では、24項目の問題行動に関する見聞実態、体験欲求および善悪判断を求め、最初に発達差と性差を分析した。その結果、見聞実態と体験欲求の発達差のパターンは類似していた。体験欲求に関する学校種間の主効果に基づいて、これらの発達差のパターンを分類すると、以下の4つのパターンに大別される。第1は発達と共に増加するパターンである(項目2、3、4、5、7、8、9、10、14、20、22)。第2は発達と共に低下するパターンである(項目1、12、13、17、18、23、24)。第3は中学生をピークとする逆U字形の変化を示すパターンである(項目11、15)。第4は発達差がみられないパターンである(項目6、16、19、21)。

第1の増加パターンは、24項目中11項目(46%)が該当し、問題行動に対する体験欲求が発達的に増加しやすいことを示している。第1パターンに該当する項目を内容的に検討すると、非行傾向を伴う問題行動と暴力等の問題行動が含まれている。非行傾向を伴う問題行動に該当する項目は、項目4「たばこを吸う」、項目5「お酒やビールを飲む」、項目10「お金を払わないで、店から品物を取ってくる」、項目14「人の自転車にだまって乗る」、項目22「人の傘や持ち物をかかってに使う」などである。暴力等の問題行動に該当する項目は、項目3「棒やナイフで人を傷つける」、項目8「人をおどして、お金や物を取りあげる」、項目9「学校にナイフを持ってくる」である。しかし、後者の暴力等の問題行動では、性別×学校種の交互作用から分かるように、男子では増加傾向を示すものの、女子では発達差がないか、むしろ低下する傾向にあった。暴力等の問題行動に関する見聞実態でも、項目3「棒やナイフで人を傷つける」、項目16「わざと学校のガラスや壁をこわす」、項目19「犬、猫などの動物をいじめたり、傷つける」などでは、女子の高校生が有意に低下していた。女子は高校生になると、暴力等の問題行動に対する興味・関心が低下し、暴力等の問題行動とは無縁の活動や仲間関係に関心を寄せるようになるのであろう。

ところで、これらの非行や暴力に関連する問題行動では、中学生よりも高校生の体験欲求が強くなっている項目もいくつか(たとえば、項目4と項目14など)みられるが、全体的には小学生と中学生の間に顕著な発達差があった。これらの結果は、小学5年生や6年生では、これらの問題行動に対する抑制力が強く働いているが、中学生になると、その抑制力が急激に緩むことを示唆している。この点を考慮すると、中学校入学当初の生徒指導がこれらの問題行動を抑制するのに重要な役割を果たすのではないかと考えられる。

第2の減少パターンを示す項目には、項目1「人をなぐったり、けったりする」、項目12「わざと人の持ち物をこわしたり、かくしたりする」、項目13「人を仲間はずれにする」、項目18「人のいやなこと、やりたくないことを無理にやらせる」などの对人的攻撃に関連する問題行動が含まれていた。また、項目17「机や椅子に、落書きをする」、項目23「廊下で、さわいだり遊んだりして教室の授業をじゃまする」、項目24「テストのとき、人の答えや本をこっそり見て答える」などの学校のルール違反行為や授業妨害等の迷惑行為が含まれていた。これらの問題行動の体験欲求は、小学校から中学生にかけて低下するよりも、高校生になってから急激に低下する傾向にあった。し

かし、性別×学校種の交互作用から分かるように、女子の高校生では急激に低下しているが、男子ではほとんど低下していなかった。上述の暴力等の問題行動と合わせて考えると、高校生では男子と女子の関心事が異なり、男子のみが暴力や攻撃等の問題行動に関与する可能性が高まるといえる。

第3パターンに該当する項目は、項目11「授業中に、さわいんだり、おしゃべりする」や項目15「人の欠点や知られたくないことを言って、からかう」であり、授業の妨害や「ふざけ・からかい」のような軽度の对人的攻撃である。これらは、中学生から高校生にかけて低下していることから、生徒の成長と共に興味・関心が薄れていくタイプの問題行動であるといえる。

表5の相関分析から、暴力行為等の問題行動の予防的指導に関して、いくつかの示唆が得られる。  
①見聞実態と体験欲求との間の正相関パターンは、学校内外で問題行動を見聞する機会が高い児童生徒ほど、自分もそれらの問題行動をしてみたいという気持ちになりやすい関係を示している。問題行動を見聞する機会が多い児童生徒ほど、問題行動を実行するのに抵抗感が低下することは、行動レベルには現れないものの、問題行動のモデリング効果を反映している可能性がある。暴力の多発する地域では、暴力に関与する機会が多くなるという研究結果(Loeber & Hay, 1997)を参考にすると、学校内外で暴力を見聞する機会が低下するように環境づくりを行うことが、問題行動の抑制にとって大切であると指摘できる。

②体験欲求と善悪判断の負相関パターンは、問題行動を悪いことだと感じる児童生徒ほど、それらの問題行動を自分でもしてみたいとは思わない関係にあることを示している。その意味で、小学生の段階から児童生徒の問題行動に対する規範意識をしっかりと形成しておくことが、問題行動の体験欲求とその実行を抑制することにつながると指摘できる。

③見聞実態と善悪判断の相関値は、全般に低い値を示した。この結果から、問題行動の見聞実態と善悪判断は直接結びつかず、学校内外で問題行動を見聞する機会が高い児童生徒であっても、それらの問題行動の価値判断は大きく変動しない可能性が示唆される。しかし、見聞実態と体験欲求の正相関パターンにみられるように、問題行動を見聞する機会が高いほど体験欲求が促進されるので、そうした機会が累積されると、善悪判断にも影響がでる可能性も残る。したがって、問題行動の善悪判断が形成される小学校時代にしっかりと判断基準を内面化させ、誘惑の多い中学校や高校段階では強い内的な価値基準に基づいて誘惑に抵抗できる力を育成する必要がある。

## 引用文献

- 小嶋佳子・松田文子 1999 中学生の暴力に対する欲求・規範意識、加害・被害経験、および学校適応感 広島大学教育学部紀要第一部(心理学), 48, 131-139.
- Loeber, R., & Hay, D. 1997 Key issues in the development of aggression and violence from childhood to early adulthood. *Annual Review of Psychology*, 48, 371-410.
- 少年の問題行動等に関する調査研究協力者会議 2001 心と行動のネットワーク—心のサインを見逃すな、「情報連携」から「行動連携」へ— 教職研修, 6, 152-164.

- 総務庁青少年対策本部(編) 1999 青少年とテレビ・ゲーム等に係る暴力性に関する調査研究報告書  
総務庁青少年対策本部
- 総務庁青少年対策本部(編) 2000 青少年白書(平成 11 年度版) 大蔵省印刷局
- 総務庁青少年対策本部(編) 2000 低年齢少年の価値観等に関する調査 大蔵省印刷局
- 総務庁青少年対策本部(編) 2001 青少年白書(平成 13 年度版) 大蔵省印刷局

#### 付記

本研究は、広島県教育委員会と広島大学との共同研究プロジェクト「生徒指導上の問題行動に関する専門的な研究プロジェクト」の「暴力行為等の問題行動に関する研究プロジェクトチーム」が実施した平成 12 年度の調査データの一部をまとめたものである。また、本研究は平成 12 年度教育学部共同研究プロジェクト推進経費の援助を受けて実施されたものである。調査対象校の児童・生徒の皆さんをはじめ、先生方ならびに関係者の皆さんに心から感謝の意を表します。